

東京大学社会科学研究所教授

# 玄田有史

Yuji Genda

豊かでありながら人々があまり「希望」を持てずにいる日本。特に就職難に直面している若い世代に元気がないと言われる。玄田氏は「希望学」という新たな学問分野を提唱し、生きるエネルギーを生み出す「希望」を持つにはどうすればよいのか、フィールドワークを通じて研究を続けてきた。日本に「希望」がないとは本当か、この壁を乗り越えて若者を元気づけるにはどうすればよいのか、豊富な知見を基に語っていただいた。

扉を  
開く  
INTERVIEW

# 「希望王」

若者に「大丈夫!」と言ってあげたい

——現代の日本では「働きたくても働けない若者」が大変増えていると言われています。彼らは働く意思を持たないのではなく、意思があっても仕事がない。一方では若者が失業していることに関して彼ら自身や親たちに責任があるということも言われがちです。

**玄田** 私は、「本人が悪い」「親が悪い」「学校が悪い」「企業が悪い」「政府が悪い」などという犯人探

しのような議論はやめたいと思っています。具体的に一步踏み出すために何ができるのか考えた方がいい。私が所属している研究所で「希望亭」の研究を始めたきっかけも、ニートやフリーターが増え、若い人たちが働くことの困難さが論じられる時代に、ただ意欲が低いとか能力が足りないということが問題の本質とは思えなかったからです。

何かを持ちたくても持てなくて

凄くもがいている、苦しんでいる若者が多い今、最も欠けているのは「希望」ではないでしょうか。個人の意欲や能力ではない。希望があればすべてハッピーということではないけれど、やはりそれがないと進んでいくエネルギーは生まれてこないのではないかと。それならどうすれば若い人たちが「希望」を持てるようになるのか考えなくてはいいかもしれません。

——確かに現代の日本では高齢化や人口減少などを背景に先行きを心配する声が聞かれるなど、なかなか明るい気持ちになれないですね。

**玄田** 高等学校から講演依頼をいただくことがあって、依頼元はほとんどがいわゆる「指導困難校」と言われる学校です。中退者が多いし、正社員の仕事に生徒を就かせてあげることが難しい。そうい

う学校の生徒さんや先生、保護者の方にいつもお話しするのは厚生労働省が二〇〇一年に始めた「総合労働相談コーナー」のこと。ここは働くことに関するあらゆるトラブルについて無料で相談に乗ってくれる場所で、全国で三八五カ所あります。賃金の不払いとか不当解雇、職場のいじめやセクハラなど、相談事は何でもいいんです。そういうところがあるかないか知っているだけで、泣き寝入りせずに済むかもしれません。一方では「希望」という曖昧模稜としたものを求めつつも、その一方で具体的に前へ進んでいく知恵を若い人に授けることが非常に重要だと思います。

——知っていれば、心強いですよ。  
**玄田** そうです。私がこういうことを言うのは、「(心配しなくても)大丈夫だよ」と言ってもらえた経





げんだ・ゆうじ●1964年島根県生まれ。1988年東京大学経済学部卒業。2002年大阪大学経済学博士号取得。東京大学社会科学研究所教授。専門分野は労働経済学。2000年学習院大学教授、2002年東京大学社会科学研究所助教授、2007年4月より現職。2005年から進める「希望学」研究プロジェクトの中心メンバー。著書に『仕事のなかの曖昧な不安』（第24回サントリー学芸賞、第45回日経・経済図書文化賞）『ジョブ・クリエイション』（労働関係図書優秀賞、第45回エコノミスト賞）『人間に格はない』など雇用に関する著書多数。

ちりした育成プログラムのようなものよりも、先輩の何げない一言が転機になったような気がします。だから古臭いと言われようと、若い人に「こうしておけば大丈夫だから、頑張ってみたら」といろいろな人が言ってあげたいと思います。

## 衰退する鉄の町に見た確かな「希望」

——先生はご著書『一四歳からの仕事道』で「ちゃんといいかげんに生きる」と書いていらつしやいますね。

玄田 それがモットーです（笑）。「ちゃんと」と「いいかげん」の間を漂うような感じでいいんじゃないかと。若い人をひとまとめに語るのはあまり好きではありませんが、優しくて繊細な人が多いのに「0」か「1」かで考える人が多いです。人多すぎるとも感じています。人生を「白」か「黒」かで考えたら実はほとんどが「灰色」なわけで、そこで自分に似合った灰色を見つければそう悪くないんじゃないかと思うんですけれど。

——一つ反省するのは自分も含めて、社会の価値観が「わかりやすいこと」に偏り過ぎているんじゃないかということ。わかりやすさは大切なことだけれど、いざ人生

を生きようとしたらほとんど不可解なことばかりなんですから。わかりやすくないとダメという価値観の中ばかりで暮らしていたら、わかりにくさに出会ったとき不安になるのは当然です。だから私は若い人に「迷っていいんだ」と言います。迷ったり悩んだりすることがあって初めていろいろな気付きがあるわけで、大人の方も、上手に悩ませたり失敗させたりすることがとても大事ではないでしょうか。

——親や上司がうまく経験を積ませることが必要なのでしょうか、その余裕がなくなっているのかもしれない。

玄田 私たちは岩手県釜石市でフィールドワークを続けてきました。ここは明治以降官営製鉄所が置かれ、新日鉄釜石製鉄所になったからさまざまな浮き沈みを経

験が若い人たちの間であまりにも少ないと感じているからです。「大丈夫？」と聞かれることはたくさんあるけれど、それは結構しんどい。大人たちにはできれば「！」をつけて、「大丈夫！」と言ってもらいたい。こんな将来の見えない環境で「大丈夫！」なんて甘いと言われるかもしれませんが、将来に不安を抱えているときこそ言われたい、言ってあげたい言葉だと思いませんか。

——やみくもに不安をあおっても解決には結び付かない……。

玄田 そうです。前に福島県のあ

校を出たての女性二人を社長さんが抜擢（ぼつてき）して、結構大きな仕事を任せたそうです。案の定なかなかうまく行かなくて、しんどくて辞めそうになったとき、四〇代ぐらいの男性がぼろっと「今のうちにちゃんと失敗しておけば大丈夫だから。みんなそうだったから、あまり気にするな」と、福島弁で訥々（とつとつ）と言ってくれた。そうしたら二人はふっとラクになり視野も広がって、ぐんぐん伸びていったというんです。おそらくその男性も過去に、先輩から同じようなことを言われたんじゃないかと思う。自分のことを振り返ってみても、がっ

てきた土地です。高度成長期には大変景気は良かったですし、人口も増えました。しかしその後は高炉がなくなり、一見かつての繁栄がうそのように思えます。それでは希望がなくなつたのかというところではありません。相変わらず果敢に、前向きに生きている人がたくさんいらっしゃる。

いろいろな事業をやつて失敗を繰り返しながらもめげないYさんという方に、「Yさんの夢や希望って何ですか?」と尋ねたことがありますが、夢を保持したまま死んでいくことだ」とおっしゃった。格好いいと思いました。ああいうおじいさんになりたいですね(笑)。挫折し続けてもめげずに「三人わかつてくれる人がいたら大丈夫だ」とも言う。本当にそうだと思うのです。

よく言われている「生きづらさ」の原因の一つは、今の人間関係の苦しさにあると思います。「KY」(注)などと言われないように、みんな気を使いながら生きている。だけど、本当にわかつてくれ、励ましてくれる人が三人いれば厳しいこ

とも含めて何とかなると、Yさんはおっしゃるわけです。こういう感覚は世代を超えて共有したいですね。

——上の世代の方々は戦争も経験され、相当波瀾(はらん)万丈の人生を送ってきたのに、意外とその話が下の世代に伝わっていないのはもったいない気がします。

玄田 その通りです。実は彼らの話の中には、若い世代にいろいろなヒントやチャンスを与える内容がたくさん含まれている。また、話す本人にとつてもの凄く大きくて前向きな影響を及ぼします。私たちは釜石に行き始めたときは名前ではなく「東大さん」と呼ばれていました。苦しかったことを聞き出そうとしても「しゃべることなんかない」とみんな素っ気ない。緊張するから嫌だと言われて、なかなかうまくいかなかったんです。でも何度も通ううちに打ち解けてきて、いろいろな話をして下さるようになっていきました。ある高齢者の息子さんから「東大さんに来てもらつてよかった。おやじが元気になってきた」と言われたときは嬉しかったですね。自分

が生きてきた道のりを真剣に聞いてくれる他人がいる。そこに「希望」が生まれたんじゃないでしょうか。

——自分では大したことがないと思っている経験でも、話を聞くと他人にとつてはとてもためになるということがありますね。

玄田 転職するとか、フリーターから正社員になるための面接を受けるときに、「今までどういうことをしてきましたか?」と聞かれてもうまく答えられない人がいますね。それは中身がなかったんじゃないくて、自分で気付いていな



いことが多いんです。コンビニエンスストアで長年アルバイトをしてきた若者が、「おれは別に何もしてないから」と言う。でも突っ込んで質問すると実にたくさんのことやっていると。レジを打ったり商品を整理するだけじゃなくて、商品の発注までやっていた。また、「この店の利益率が高いのは内引き(内部による万引き)が少ないからだ」「内引きが少ないのはアルバイトの雰囲気がいいからで、それはおまえがよくみんなをまとめているからだ」と褒められたことがあるというのです。

(注) 周囲の状況にふさわしい言動ができない人を指す、若者の言葉。「空気(K)が読めない(Y)」の頭文字。





——それは大変な評価ですね。

**玄田** 彼は自分の損得勘定を超えて周りの面倒を見ていた。それを見ている人がいたわけです。若いうちは目先の損得勘定ばかりにとらわれず、いろいろなことをやってみた方がいい。その方が成長しますよ。実は「希望学」の発見の一つは、あまり損をしたくないという気持ちが強すぎると、「希望」自体もなくなっていくことなんです。「希望」をかなえるための最短距離を進んでいると、逆に偶然

の出会いが失われる。「希望」なんて見えそうで見えないもの。それなのに効率的な行動ばかり取っていると、かえって大事なことが失われるように思います。

ある記者から取材を受け「希望に一番必要なものは何でしょうか？」と聞かれたので、「遊びだと思う」と答えたらげんなり顔

## 「まんざらじゃない」はとてもいい言葉

——今の学生は非常に大企業志向が強いですね。「安心」を求めているのですが、大企業が安心とは言えない時代です。

**玄田** 「希望」と違って「安心」はある程度結果が伴わないと得られない。見通しがないと。例えば、将来きちんと年金がもらえそうだという見通しとかがないと、安心しろと言っても安心できないですよ。ね。「希望」とは少し違うんです。「希望」とは、結果より模索そのものなんです。多分若い人には「希望」と「安心」の両方が必要なんです。何でもリスクを取れと言うのではなく、ちょっといいから安心できる場所を社会で広げられ

をされ、「遊びの意味について説明してほしい」と言われたのがくぜんとしました。その人はために質問しているわけです。意味があるかどうかかわらないけれどやってみたいものが遊びであるはず。彼の反応は今の若い人の生きづらさを象徴しているように思いました。

るといいのですが。

今私が若者を対象に講演するとき、比較的反応が良いのは「ウィークタイズ」（緩やかなつながり）の話です。日本社会は長いこと、地縁・血縁・社縁のような「ストロングタイズ」に支えられてきました。でもすでにそれは失われつつある。しかしそこに自分と少し違う価値観とか経験、情報を持っている人と緩やかにつながっていることが大事だと言うと、彼らの目の色が変わりますよ。「働く」ということはその「ウィークタイズ」を作ることなのだと言えば、少し彼らの気もラクになるかもしれません。そこで生まれるご縁を

感じながらやっていけばいい。

——上の世代がうまく働き掛けることが大事ですね。

**玄田** 私が気を付けているのは、若い人を決めつけないことです。職場だって、若い人が「もうやっていられない」と思うのは決めつけられたときなんです。上司は評価などである程度決めなくてはいいけないこともあります。しかしそれは「決めつける」とは違う。「0」か「1」かで判断しがちな若い世代をもっと緩やかに受け止め、緩やかに理解することが大切ではないでしょうか。

最近私は「まんざらじゃない」という言葉が気に入っているんです。人生はいいことばかりではなく、苦しいこともたくさんある。しかし「希望」を模索しながら生きてきて、過ぎてみればまんざらじゃなかった。そう言えば十分に人生を楽しんだことになるのだ、ということも若い人に伝えたいですね。

——本日はどうもありがとうございます。